

平成28年10月24日(月)

老球の細道 277

## ゲームマネジメント (VII) ゲーム中のコーチング全般

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今までコーチング姿で最も衝撃を受けた人は1972年(昭和47)の福島インターハイで女子初優勝を飾った長崎県代表鶴鳴女子高校コーチ中村和雄氏である。氏の激しいボディアクションと炎のようなコーチングの姿には、当時大学1年生だった私には大きな衝撃だった。それまでベンチに座りっきりで黙っているコーチや審判に文句ばかり言っているコーチしか見ていなかったから。シュートが1本入るたびにベンチで開脚ジャンプ、閉脚ジャンプをガッツポーズを交えながらやる。まるで「コント55号」の演技のようにベンチ中を動き回り、飛び跳ねながら大きな声を出してエネルギーに立ち回る。その後私も真似したことは言うまでもない。

もう一人衝撃を受けたのは、20年以上前になるがNBAロサンゼルスレイカースのヘッドコーチ時代の名将パット・ライリーである。オールバックのヘアースタイルにアルマーニのスーツでビシッと決めて、ハリウッドの俳優がコーチしているようで実にかっこよかった。その後私はベンチの服装でジャージ姿とさよならしたことは言うまでもない。

コーチはゲーム中において行動、服装のみならず自分の態度に細心の注意を払わなければならない。チームのリーダーとして、プレイヤーのお手本として非の打ちどころない態度であるべきだ。コーチは常に多くの人の注目の的になる存在だからである。

ゲームが始まったら頭脳を全開させ、ゲームプラン通りにいくように様々な状況に応じてプレイヤーに適切な指示を出し、冷静さを保ち、コーチの闘志がプレイヤーに常に伝わるよう努力する。ゲーム中のコーチには「3つの敵(3F)」が立ちほだかる。負けてはいけない。①疲れ(Fatigue):呼吸を失う②ファール(Foul):プレイヤーを失う③フラストレーション(Frustration):平常心を失う。

コーチのレフリーへの態度にも注意を払うべきである。近年レフリーにクレームをつけるコーチが多いが、ジョン・ウッデンは次のように言っている。

「不確かなことについて異議をとねえたり文句を言ったりしてはいけない。レフリーの決定を疑っていたのでは何も得ることはできない。しかし、権利は主張し、そのためには戦うべきである。そのためにはルールを熟知しなければならない」

ゲームが始まるとゲームプラン通りにいかない場面が必ずやってくる。コーチの腕の見せ所である。わずかな修正でゲームプランは修正でき、結果として大きな実を結ぶ。ゲームプランを大きく変更することは得策とは言えない。最初の準備がむだになる。練習でやってきたきたことに焦点を絞ること。そうでないと、コーチがパニックになっていることをプレイヤーに知らせることになり、プレイヤーもパニックに陥るだろう。

最後に、意外と気が付かないのが控えプレイヤーの指導である。ひどいチームになると、居眠りをしたり、おしゃべりをしている情けないチームを見かける。「選手はコーチが思っているほど思っていない」。控えのプレイヤーに対しては自分がマッチアップする、されそうなプレイヤーに注意を向けさせ、交代したらよい仕事ができるよう常に準備させておく。控え選手は観客ではない。ゲームを学ぶ学生であることを常に言い続けたい。